

遺業を踏みつける虞れがあるのを氣遣ひ、或は一地方から悔やみに行く人に縋つて、是非廢刊されないやうに盡力をしてくれと、頼んでまゐります、その熱心と懇切には、遺族は勿論、事に携はつてゐる友人をも、動かしました。

故人は、一面は道樂と面白づくてやつたことにもせよ、それが室内個人の事ではなく、「衆と與ともに樂しむ」といふ性質の藝術に附隨した仕事であつたために、「みづゑ」は確に一部の人の内部生活と、いつの間にか、切つても切れぬ交渉を有つて來てゐるのであります、況して故人も主なる目的としては、やはり水彩畫の發展、趣味の普及にあることは「みづゑ」巻頭で明記して居るのです、もうかうなると、自分たちの都合ばかりで、手輕く廢滅するわけにはまゐらなくなりました。

併し大下氏が嘗てあつたやうに、中心となつてやる人は、やはり有りませむ、がともかく、友人や門生たちで、編輯の方を受け持ち、「みづゑ」の經營を、大下家の事業としてやることになりました、諸先輩が「みづゑ」のために、講話や寄稿を御承諾下されたことは、何よりの悦びです。

故人は死んでも、故人の遺業は、守り立てゝ下さるやうに、同情ある皆さまに御願ひします、大下氏は一面から言へば、日本の水彩畫のために、犠牲になられた人です、この上「みづゑ」のために、大下家の寡婦と孤兒とを、まで、更に犠牲にするやうなことになることを望みます、又我々も、そのために、最善の力を盡くすつもりで居ります。（故人の忠實なる友人、紀念號の編輯人某、記）

紀念號に就いて

大下藤次郎氏逝去に就いて、本號全部を、故人の記事で埋め、紀念號として、靈前に獻げることになりました、諸名士が、春鳥會の請を容れられ故人に關する憶ひ出の多い文章を賜はられたことは、編輯人の深く感謝するところであります、編輯をしてゐながら、涙の灑ばれるやうな情誼の厚い文章を、拜見しました。

遺稿として、故人の文章二篇を収めてあります。「水彩畫獨立展覽會に就て」の方は、早くから認めて置いて、未だ時機が早くて、公けにせずにあつたもの、「斷片語」の方は、考へついたことを、無造作に、反古の端に書いてあつたのを、繼ぎ合せたのであります。今讀んで見ますと、高いところから、冴えた聲で、道を説かれるやうな氣持がいたします。但し標題は、編輯人が、後から、くつつけたのです。

原色版挿繪は、いづれも故人の作品であります。第一に掲げた「やなぎ」は、目下開會中の、文部省美術展覽會に、喪章と花環を獻げられて、陳列されたもので、故人の公開された作品の、最後のものであります。故人は植物の中で、殊に楊柳を好んだやうに見受けられました。

諸名士御惠贈の文章の中で、標題の無かつたものは命け、又同じやうな標題が、重複した分は、その中の或ものを、改めました。これは同じやうな題であるために、内容まで、大概同じものと推測され、一つ讀んであとは見ずにしまふといふやうなことが、萬一あらはれては濟まないと存じたからであります。

故大下藤次郎氏の畧歴

氏は明治三年七月九日東京市に生る。明治二十四年九月より全二十九年五月まで故中丸精十郎氏の門に遊び油繪を研究す。次で全年十月より全三十二年十二月まで故原田直次郎氏に就き油繪、水彩畫を研究し、全三十一年三月見學の爲め濠洲諸邦を巡遊す。明治三十五年十月洋畫研究の目的を以て再び外遊し、歐米諸國に遊びて全三十六年六月歸朝。氏は太平洋畫會創立當時より理事、評議員に歴任し、今日に至る此間専ら水彩畫の趣味普及に勤め、明治三十七年六月春鳥會を創立し、全三十八年雜誌「みづゑ」を刊行し、進んで全三十九年一月日本水彩畫會を創立し、全時に水彩畫研究所を起し、爾來專念能く後進子弟の薰陶に盡し、今や氏の事業は着々其の理想の如く行はれんとしつゝ、ありしに突如として全四十四年十月十日午後四時病急に革まり永眠す。時に齡四十二歳、翌十二日午後一時佛式にて葬送を營み、東京府下雜司ヶ谷齋場に葬る。戒名至誠院樹德英澡居士と號す。